

## エディトリアル

川崎市立多摩病院救急災害医療センター センター長 田中 拓

本特集では地域医療の現場におけるリハビリテーション(以下、リハビリ)についてご紹介いただいた。エディトリアルの筆者はリハビリについて門外漢である。しかし、昨今リハビリの有用性、必要性は高まっており、患者(住民)の生活の質の向上に必須であると耳にすることが多く、本特集を企画した。かつての運動器のみを対象としたリハビリのみならず、脳卒中、心筋梗塞、神経筋疾患、悪性腫瘍などさまざまな病態の急性期からの積極的な介入によって患者のADLの向上が期待されている。その適用される場合は急性期病院から回復期、施設、在宅まで多岐にわたる。さまざまな立場でリハビリに関わる専門家から、それぞれの場におけるリハビリの有効性、可能性と問題点などをお示しいただいた。

まずは総論として緒方徹先生にリハビリの歴史と変遷についてご執筆いただいた。リハビリが障害に対する機能回復や能力向上のために使用され始めたのは第一次世界大戦が契機とされている。日本における社会構造、疾病構造の変化に即して療養から急性期、活動性の維持や疾病との共生を目標としたリハビリのこれまでにについて述べられ、そして再生医療やロボット技術、IT技術を活用したこれからのリハビリの形についてご呈示いただいた。

次に山口潔先生に在宅でのリハビリについてお示しいただいた。生活期の医療について包括的に関わる中で、認知症、ロコモ・フレイル、がんに対する支援、介入についてリハビリの有用性を具体的な仕組みを通してご呈示いただいた。いずれも早期から適切に介入することで高い効果を上げることが期待できる。

上本宗唯先生には整形外科医として運動器リハビリテーションに特化したクリニックでの活動をご紹介いただいた。年齢や障害によってあきらめていた機能が、適切な多職種の関わりにより拡大し、自信とQOLの改善につながる。まさにリハビリの可能性を感じさせてくれる一方で、現行の保険診療上の大きな問題点にも触れられている。

福島恭平先生には少し視点を変えて集中治療室でのリハビリについてお示しいただいた。推奨される早期離床に向けた医師、看護師を含めた関わりと、COVID-19におけるコミュニケーション、レッドゾーン内でのリハビリの実際、職種を超えた工夫を知ることができる。

最後に有我知夏先生には回復期病棟でのリハビリについて実例を挙げながら、ご紹介いただいた。退院後の地域での生活を視野に患者一人ひとりの個別性を重視し、自発的な生活につながるリハビリの提供について納得できる事例と解説を示していただいた。

本特集はリハビリについて無知なエディトリアルの筆者を一気に最前線のリハビリ現場に引き上げてくれた。各々の背景で実践されるリハビリは一律のものではなく、創意工夫に富んでおり、患者の生活の質を確実に向上させると思われる。

リハビリを専門とされている方にも、これまでひょっとして理学療法士まかせだった方にも、本特集が明日からの患者との関わりをより積極的にする契機となれば幸いである。